祇園祭の山鉾巡行は成立したころ、どのような様相を示したか。中世祇園祭（祇園会）を研究する奈良大の河内将芳教授によると、室町時代の山鉾はいまの倍近い数に及び、史上最も盛大だった。町衆が自立的に担い、時に権力に抗して営んだとのイメージを抱きがちだが、実際には室町幕府や延暦寺といった中世の権力者の意向や力関係も色濃く投影されていた。河内氏のインタビューや著書から、ルーツとなる中世の姿を探る。

（日山正紀）

祇園祭 2022

山鉾・神輿、権力の力関係投影

中世祇園祭を考察

河内将芳・奈良大教授に聞く

いま34基ある山鉾は応仁・文明の乱（1467～77年）後、戦国時代さなかの1500年に再興された姿を出発点にしている。だが、再興を目の当たりにした公家は「もっとも略儀なり」（近衛政家『後法興院記』）とつづった。

では、乱前の室町期はどうか。河内氏は「戦国期の『祇園会山鉾事』（八坂神社蔵）によると、前祭に当たる旧暦6月7日に32基、後祭の同14日に28基の計60基が出た」とのにぎわいぶりを紹介している。

60基、西陣・白河も

参加は四条通を中心とした「下京」に限らなかった。例えば、「さきほく（鷺鉾）　北はたけ（畠）」「かさほく（笠鉾）　大とのゑ（舎衛、舎人）」。一対で存在したとされ、北畠は相国寺に属する民間の陰陽師集団、大舎人は西陣辺りの織手集団とみられ、いずれも上京周辺にいた。別の史料には、京郊外の「白河鉾」、油座で知られる山崎の「定鉾」の名もある。山鉾は60基を上回っていたかもしれない。

当時の担い手たちが商工業者をはじめとした町人主体なのは確か。だが、自立的だったかは微妙で、足利将軍家など幕府の意向を無視できなかった。

祇園祭は平安時代からの神輿（みこし）渡御に加え、室町時代に山鉾巡行が形をなしたことで、いまの2本柱のかたちが整った。だが、神輿が出ていないのに、山鉾が単独で渡るケースも中世には散見される。

3代将軍・足利義満のころには、神輿渡御のない、祇園会が10年余り行われていた。義満による山鉾の御成見物に関わっているとみられる。8代将軍・義政のころ、通例の巡行コースを通らず、将軍御所へ向かったこともあった。将軍がいつどこで御成し、見物するかは、当時の人からも権勢を示すバロメーターとみなされた。「歴代将軍ら実力者が政治的にアピールする舞台として並々ならぬ意欲を見せ、諸役として強制さえした」（河内氏）。

町衆の心意気？

これを理解するための視点が、中世の権力や社会の成り立ちという。

その特徴は朝廷、幕府、寺社という権門（ごんもん）が伍しながらも権力や経済力を分け合う「権門体制」。祇園会に対しては、中世の京都を治めた幕府が山鉾に、祇園社を末寺・末社にした延暦寺（日吉大社）が神輿渡御に影響力を行使した。加えて、幕府と寺社は、世俗権力の正当性を寺社が裏打ちする一方、仏神事を振興する立場の幕府は、寺社の要求を無視できないという関係にあった。これら権門同士のパワーバランスが傾くと、どうなるか。

室町幕府、巡行で政治的実力誇示

渡御には延暦寺が影響、武力で脅しも

これを物語るのが「神事これなくとも、山鉾渡したき（神輿渡御が停止になっても山鉾巡行は行いたい）」（1533年『祇園執行日記』）の文言だ。かつては幕府の中止要請に抗し、町衆は挙行しようと心意気を示したとされた。だが、河内氏の見方は違う。

この時も含めて幕府は祭礼を推進することが多く、真に中止を求めたのは、延暦寺だった。神事を行えば、軍勢を祇園社へ向かわすと、武力をちらつかせたため、幕府は式日の延期を前日に命じてしまう。これに呼応し、担う町人側が申し入れに及んだ。

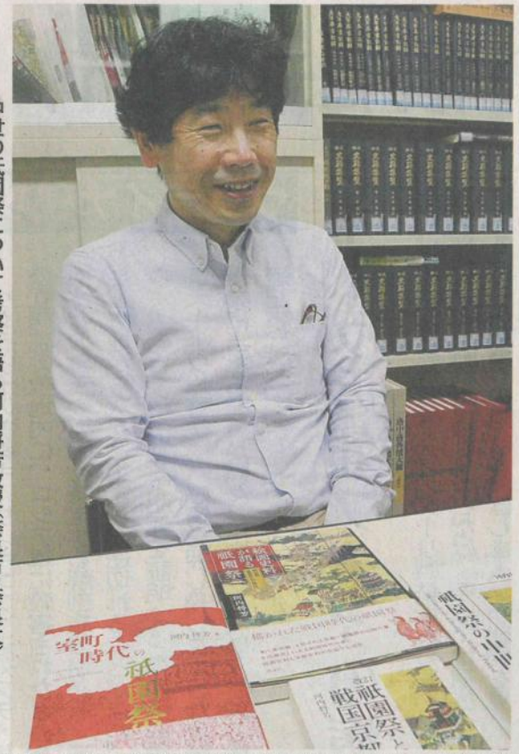
応仁の乱以降、幕府は著しく衰退し、大名をしのぐ武力まで備える有力寺院を押し返す力はない。この一件は権門の力関係が変わり、山鉾も延暦寺の意向に左右されるようになったことの現れとみる。

一方、この頃に自衛のための町共同体が生まれ、地縁でつながった都市民が祭りを担うなど、自主性の高まりは感じられるが、「『幕府対町衆』といった二項対立的にみる『町衆の祭り論』と結びつけるのは無理がある」という。

1500年の祇園会再興も、実は幕府管領・細川政元の旗振りが大きい。「応仁の乱が終わって33年間ものブランクがあり、記憶も薄れる中、町人側からは再興に後ろ向きともいえるニュアンスも示されている」（河内氏）。その後、政元まで政争で殺された幕府はますます後景へ退く。延暦寺の都合による式日の変更は相次ぎ、冬の祇園会も珍しくなくなってゆく。

秀吉期に転換か

この不安定さに終止符を打ったのが、織田信長だった。1571年、比叡山を焼き討ちし、力をそいだことによる。信長亡き後の天下人、豊臣秀吉はどうか。京都の通りや町割を替える京都改造の際、山鉾町には手を加えず、近くの町に米や銀などを寄付させた「寄町制」という支援の仕組みを整えている。「秀吉の関わりは文献では明らかにできていないが、近世への山鉾の継承・転換を考える上で大きなターニングポイントになった」（河内氏）。



中世の祇園祭について考察を語る河内将芳教授（奈良市・奈良大）

かわうち・まさよし　1963年大阪市生まれ。京都府立大文学部卒。京都大大学院博士課程修了。博士（人間・環境学）。2010年から現職。中世京都の研究のほか、八坂神社と清水寺で古文書や古記録の調査や史料集の刊行に関わる。著書に「室町時代の祇園祭」（法藏館、20年）、「改訂祇園祭と戦国京都」（同、21年）、「大政所と北政所」（戎光祥選書ソレイユ、22年）など。

こころ